

あの日から 7ヶ月

相原 孝至 (宇都宮教会信徒)

あの日から 7 か月が経ちました。当初のどうしたらよいのかと、うろたえた日々が、まるで昨日の事のように思い出されます。10月9日に初めての臨時総会が開催されて、陪餐会員 35 名中、20 名の出席の中で、議事がすべて満場一致で可決されました。聖句も定まり、会堂の再建の意思決定がなされました。これからが「神さまの時」の幕開けだと思わず身震いがしました。神様に託された使命の重さと、これからの道のりの不安の両方でした。私の個人的な心の内を述べ、宇都宮教会の歩みをご報告させていただきます。初めは、11 月末に献堂の決心と資金計画の議事をもって臨時総会に臨もうと計画していたのですが、資金計画は再建の意思決定が無くては皆さんに問うことが適わず、また建築に関する種々の専門知識も必要になり二段階で総会をもつことにしたわけです。

宇都宮教会の建物は、石造りの会堂と木造の牧師館で成っています。寄る年波で牧師館の劣化がひどく、今までの建築積立金は新牧師館購入に充ててしまい、資金ゼロの中でどうするのか途方に迷いました。この愛すべき御堂はさすがに古ぼけていて、また使いにくい間取りと高齢者には優しくない構造になっていました。しかし、石造りだから、何とかもって来て次の世代に任せてしまおうかという気持ちに、神様は鉄槌を振り下ろされました。神様のみ言葉を宣べ伝える殿堂のことを深く思い起こしなさい、今やらないで何時するのだという槌でした。

会堂は、当日の壁の崩れや柱のひびは埋めてありますが、あれ以来続く余震で新たなひび割れもあり、礼拝や祈祷会、催し物の時々不安を覚えるのもたびたびであります。教団、教区、地区の先生方また大宮教会の松下氏をご覧になった時点の状態より建物構造の痛みは進んでいるものと外観的にも推測されます。そんな中でたくさんの励ましやお見舞いをいただきとても感謝しています。しかし、私たちは礼拝をそのまま続けていますから、大きく損傷している地区・教区さらに教団の他の教会や伝道所に何か引け目を感じました。ここに私の悩みがありました。教会の総意でなければ長老会で献堂のことを論ずることはできないからです。余震が少し落ち着いてくると再建の二文字が薄らいでくる気がして焦りがありました。他の被災教会は教区総会の場でもブースを開いて呼びかけをしているのに、どうしようと焦りと思案ばかりでした。しかし、話し合いが重ねられる中で、冷静に現実を考える余裕は少しずつ芽生えていたと思います。静かにみ心を問う日数が必要だったのです。7月31日の全体話し合い会では、長老が新会堂を献堂する方向で話し合うこと(長老会ではない)の許しを頂きました。牧師を含め 6 人の長老は平日に何回も時間をかけて、問題を整理しつつ道筋を立てていきました。総会では、新会堂を今の場所に建てる・設計者を選定する・建築委員会を立ち上げることが議決されました。先週時点で 16 人の委員が定まり、月末には第一回目の委員会の開催が予定されています。

この事業を通して、一人もつまづくことなく、一人ひとりが変えられ信仰が確かなものになっていくものと信じています。神様のなさることにどう応えていくかとワクワクしてスタートを切りました。どうぞ皆様のお祈りに加えて下さいますようお願い申し上げます。

東日本大震災救援募金 へのご協力を！！

目標額 10 億円

募集期間 2011 年 7 月 1 日から 2015 年 3 月 31 日

振込先 00110-6-639331 名義 日本基督教団東日本大震災救援募金

「つながり続けるために」

新井 純（十日町教会牧師）

10月3～6日、現状の把握と、転換期を迎えるであろうボランティア活動の今後の展望を協議するため、兵庫教区被災者生活支援長田センターの柴田主事に伴い、新潟教会の長倉師と共に岩手県と宮城県のボランティア活動拠点を訪問してきました。

3日、土沢教会を問安した後、新生釜石教会を訪ねました。ご存知の方も多いと思いますが、新生釜石教会には教会駐車場に通称赤テントと呼ばれた、被災者の方々が休憩、交流ができるスペースが造られていました。これを9月30日に撤収、活動は一時休止に入りました。赤テントは被災直後から憩いの場として、また淀川キリスト教病院やJOCSの医師による健康相談や、その他ボランティアによる傾聴が行われ、「教会さんの赤テント」と言えば周辺地域では知らない方はいないと言っても過言ではないほど、大切な働きがなされてきました。惜しむ声や復活を望む声も少なくなく、柳谷牧師も苦渋の決断であったと思われる。柳谷牧師は支援活動の再開を希望される一方、相当の疲れを溜めています。専属のボランティアコーディネーターの必要性も訴えられ、今後の中長期的支援にはいっそうの人的支援が課題となりそうです。現時点での活動再開は未定です。

釜石滞在中は、山間部の仮設住宅も訪問しました。訪問当日は天気の良い穏やかな日だったので、外を散歩する方や草木の手入れをする方などにお話を伺うことができました。「避難所に比べれば快適」との声がある一方、利便性や人間関係からすでに仮設から仮設への転宅をされている方もおられ、また今後そういった問題は時を追うごとに噴出してくるのが予想されるので、一日も早い落ち着いた生活を取り戻すことができるようにと願わずにはいられませんでした。

4日夕には宮古教会を訪問しました。YMCAの協力で支援活動が展開されている宮古教会ですが、現在も汚泥除去の依頼が多くあるなど被災直後が続いている印象でした。ただ、森分牧師の表情は明るく、地域の方々と共に生活再建への歩みを力強く押し進めているたくましさを感じました。むろん、決して表には出せない数々のご苦労があるのは言うまでもなく、自覚なきままに蓄積される心身の疲れが健康を害さないようにと祈るばかりです。新潟地区では11月3日開催の地区信徒大会に、森分牧師をお招きします。

5日は、遠野市に設置された教団の自殺防止センターを訪問しました。ちょうど教団の支援委員会のスタッフの方がおられ、お話を伺うことができました。東京の自殺防止センター他協力団体の活動を支援するという形のように、当日は十余名が釜石市の仮設住宅に傾聴ボランティアに行っているとのことでした。

夕には石巻エマオを訪ねました。常駐スタッフが3名おられ、津波の後始末や引っ越しなどのボランティアが相変わらず殺到しているとのこと。それに比して労働力が不足しており、ボランティア派遣は2週間待ちとのことでした。他団体は仮設住宅支援に徐々にシフトしていく中、労働力の不足が新たな支援活動への転換を妨げているように見受けられました。目の前の仕事依頼が多すぎるためか、スタッフの方々が次なる支援への展望を検討する余裕が与えられていないことも課題のようです。これは、翌6日にお訪ねした東北教区センターエマオでも同じでした。

長田センターの柴田主事は、「生きて仮設を出よう」と何度も口にされました。これは、阪神淡路大震災の時に200名超の方々が仮設住宅で孤独死されたのを目の当たりにしてきた苦い経験があるからです。

私たちには隣人とのつながりが不可欠です。ただでさえ震災で生活を破壊された大きなストレスを負い、生活再建の目処が立たない方も大勢いらっしゃる中、今後はなおさらのこと人と人とのつながりは大切なものとなってくるでしょう。そのことを見据えた支援を今後どう展開するか、大きな宿題をいただいて帰路につきました。